

19世紀イギリス女性雑誌研究：

The Queen (1861-63) 〈1〉¹

松本三枝子

I イギリス女性雑誌について

イギリス女性雑誌の誕生はいつ頃なのであろうか。それは女性読者が、一定数以上存在した時期と重なるはずである。Ian Wattが*The Rise of The Novel*において、イギリス小説の父として、Samuel Richardson、Daniel Defoeを位置づけ、18世紀初期を小説の誕生期とするのが定説であった。しかし最近では、それよりずいぶん前にAphra Behnや、18世紀に入ってはEliza Haywood、Charlotte Lennoxなどの女性作家が既に多くの小説を書き、女性読者が存在していたことがわかっている。

雑誌研究についても同様のことがいえる。18世紀の*The Tatler* (1709)や、*The Guardian* (1713)、*The Gentleman's Magazine* (1731)などはよく知られているが、同時代の女性雑誌についてはほとんど言及されることがなかった。これまでは、19世紀の女性雑誌はその最盛期であったにもかかわらず、文学史上では、ほとんど全く取り上げられてこなかった。それゆえ女性雑誌も、女性作家同様に、文学史では軽視されたり、あるいは研究対象から看過されてきたといわねばならないだろう。

しかし最近ではこの状況に変化が見られる。例えば現在インターネット上で利用できる、*The Waterloo Directory*では、1824-1900年までにイギリスで出版された雑誌、50,000タイトルを掲載しており、女性雑誌の情報も得られるようになってきている。これは、Cultural Studiesなどによる大衆文化研究への高まりから、女性雑誌研究への注目も大きくなっていることによるものと思われる。

女性雑誌の誕生は、前述した女性作家の登場とほぼ同時期の17世紀までさかのぼることができる。タイトルからも女性読者向けとわかるジャーナルがあり、*The Ladies Mercury* (1693)、*The Female Tatler* (1709)、*The Ladies Journal* (1727)、*The Female Spectator* (1744)などが、初期のものである。月刊誌としては、1770年に出版された*The Lady's Magazine*が初期の

ものといってよいであろう。そしてこの雑誌はその後の女性雑誌の構成要素をかなりの部分既に備えており、60年間も続いたものなので、女性雑誌の原点として見ておきたい。

The Lady's Magazine の編集方針は、既に女性読者向けの娯楽と教育をうたっており、48頁からなる。その内容は、創刊号では、“A Sentimental Journey”、“The Taylor's Dream: An Oriental Tale”などのフィクション、詩、“A Lady in Full Dress”と称されるファッション・プレート入りで、ニュースは国内、海外、アメリカの3本立てである。加えて読者からの投稿欄があり、最後は“Births, Marriages, Deaths, Promotions & Bankrupts”となっている。

以下で論じる19世紀の女性雑誌と最も顕著な相違点は、「家庭」が女性の聖域として位置づけられていないことであろう。国内外に及ぶニュースは、政治などの時事問題が、女性読者の関心として位置づけられていたことを示している。詳細な比較研究にはここでは入らないが、少なくともhomeやhouseholdは*The Lady's Magazine*のキーワードではない。それはやはり産業革命後に、家族が夫と妻で性別役割分業を定着させていく過程で、女性雑誌の内容にも大きな変化が生じたということを示している。それでは19世紀に入ってから女性雑誌はどのように発展していったのであろうか。

Margaret Beecham は、19世紀の女性雑誌を3期に分けて論じている。第1期は、1800-1850年で揺籃期である。第2期は、1850-1880年までで、Beeton夫妻の出版する雑誌、*The Englishwoman's Domestic Magazine*や*The Queen*が大成功し、中産階級と上流階級読者に女性雑誌が定着していく時期である。そして第3期が、1880-1900年で、女性雑誌が大衆向け出版物の中心的位置を確立していく時期である(Beecham 6)。

この時代はまた「女らしさ」の意味が社会の中で変化していく時期でもある。女性雑誌はそのような変化を、如実に語るものとして検証する価値がある。これまで研究対象として十分に位置づけられなかった背景には、雑誌を消耗品として軽視し、文学研究の対象から排除してきた経緯がある。加えて、単行本などに比較して、散逸が激しく、いずれの雑誌も出版時のまま完全に保存されているものが少ない。

特に表表紙や裏表紙の中に挿入された広告頁は、図書館などでの保存や合本化、マイクロフィルム化されるときには取り除かれてしまうことが多

い。広告は、当時の女性読者の関心や需要を知る上で貴重なものであるが、余分な部分と見なされてきたのである。それゆえ以下ではこの広告頁にも可能な限り目配りして19世紀中期のイギリス女性雑誌の理想と現実、女らしさの意味が女性雑誌を舞台にいかにより構築され、変容していったのかを、The Queen (1861-63) を分析することにより検証したい。

II 1860年代とはどのような時代か

まず始めに、The Queen が出版された時代の女性がおかれた状況について、確認しておきたい。なぜならこの女性向け週刊誌（週刊紙）²が創刊され大成功をおさめたのは、何よりもまずこの女性誌が時代の読者の需要を反映したものであったからだ。

飢餓の40年代を克服し、1851年のロンドン万博を成功させて、イギリスは繁栄と安定の時代に入った。ジェンダーやセクシュアリティに関する議論が盛んになった時代であり、婚姻法改正や亡妻の姉妹との再婚法案など、女性に関する政治・社会問題が脚光を浴びた。中でも、この時代の女性に関係する最も大きな社会問題のひとつに、伝染病法（Contagious Diseases Acts）に代表されるようなセクシュアリティに関わるものがある。この法律はその実際の規制対象が、性病、中でも梅毒であったことから梅毒法などと称されることもある。この伝染病法を成立させるのに皮肉にも寄与したとされるのが、Mary Elizabeth Braddon が書いた煽情小説、*Lady Audley's Secret* である。

皮肉にもというのは、伝染病法はこの時代の性のダブルスタンダードの理念に基づいた法律であり、一方、Braddon はむしろそのような社会規範からは逸脱した女性たちに共鳴しながら、女主人公を活写しているからだ。さらに女性読者はそのようなヒロインを軽蔑したり疎んじたりするのではなく、ヒロインの心情を理解し、彼女たちの心理に共鳴したからだ。

Lady Audley's Secret が、「危険な女」のイメージの確立に寄与したのは、それゆえ皮肉である。この時代の女性たちが性のダブルスタンダードに疑念や不満を表明していたにもかかわらず、依然としてそれに基づいた法の制定により、性の問題を解決しようとしたゆえである。

Lady Audley's Secret のヒロインは、確かに自立心が強く、エゴイストで野心家であった。明らかに当時の社会規範からは逸脱した女である。その

ような女が縦横無尽に小説の中で活躍し、読者はハラハラドキドキしながら、このヒロインの行跡を追っていく。物語の結末で、このヒロインである Lady Audley は、「危険な女」のレッテルを貼られて、ベルギーの片田舎の精神病院に幽閉されて、生きながらの死を宣告される。

Braddon は、当時の女性たちが感じていた社会規範や性道徳のダブルスタンダードに対する疑念や不満を体現するようなヒロイン像を造形している。Sally Mitchell などの研究によれば、これらの煽情小説は、女性参政権運動や高等教育や職業教育を受ける女性の権利請求など、同時代の政治及び社会活動に積極的に参加するほどには革新的でない、女性読者の鬱屈した不満を昇華させたとされている。それゆえ1860年代は、煽情小説の時代と称してもよいだろう。Wilkie Collins の *A Woman in White* (1861)、Mrs. Henry Wood の *East Lynne* など、煽情小説の代表的なものが揃い、ジャンルとして確立した時期であった。

そしてそれは同時に文学の大衆化の時代であり、大衆文学が、純文学に対してその存在を力強く主張した時代の到来でもあった。よく知られているのは、Margaret Oliphant の煽情小説批判であり、彼女の危惧は同時代の文学者の多くが、大衆文学に対して共有した危機意識であった。Oliphant が指摘した第1の問題は、文学の日用品化であり、消耗品化である。第2は、男性と同様に女性が欲望を持つことを、女性作家が、ヒロインの描写において明確に認めたことである。

このような文学の大衆化は、同時代の社会の大衆化を反映したものであったのは当然であり、Oliphant だけではなく、Matthew Arnold も *Culture and Anarchy* で、教養を持たない人々により、社会が無秩序に陥ると警鐘を鳴らしている。つまり大衆化は否定的に位置づけられている。それに対して、Braddon や Mrs. Henry Wood らは、自らも *Belgravia* や *Argosy* の雑誌編集にも積極的に加わり、そこで light literature として軽視された煽情小説、あるいは大衆文学を擁護している。

また、性のダブルスタンダードと深く関連して、男女の性別役割分業を固守するために、John Ruskin は、“Of Queen’s Gardens” (1865) で、自己犠牲的な家庭の天使像を積極的に賛美している。しかしこれは女性が私的領域である家庭の中で、閉塞感を感じ、公的領域である社会への貢献を求めていたことを示すものでもある。なぜならそのような女性たちの不満に対して、家庭で夫に尽くすことを通して、女性も社会貢献しているのだと

説いた Ruskin に、女性たちは強く共鳴したゆえである。つまり “Of Queen’s Gardens” は、ヴィクトリア朝時代の家父長制が1860年代には揺らぎを生じていたことを示している。

さらに Eliza Lynn Linton が、*The Saturday Review* に当時の若い娘たちのファッションや道徳観を批判して書いた “The girl of the period” (1868) は、親世代と娘世代の価値観の乖離を極めて明確に語っている。1860年代とは、上記述べてきたように、ジェンダーやセクシュアリティの観点からそれまでの家父長制的価値観が揺らぎ、中産階級的理念が見直しを迫られた時代であったということが出来る。

それではそのような時代背景の中で、*The Queen* はどのように誕生し、読まれていったのであろうか。

III *The Queen* の誕生

まず *The Queen* について語るとき、その出版者である Samuel Beeton について語らねばならない。彼はこの時代の出版業者で、*The Blackwoods* や *W. H. Smith* と並んで最も成功した人物の1人である。しかし彼の名前は、*National Bibliography* にも *Britannica* にも見出すことはできない。むしろ有名なのは妻の Isabella Beeton であり、彼女の功績も雑誌への貢献ではなく料理本 *The Household Management* (1861) の著者としてである。このような Beeton への低い評価にも、雑誌に対する低い位置づけが反映されているといわねばならない。なぜならこの時代の Beeton の出版業への貢献は、看過できぬほど大きいものであったゆえである。

その Samuel Beeton は、19世紀のイギリスにおける女性雑誌出版の最大の貢献者といっても過言ではない。それは彼が、*The Englishwoman’s Domestic Magazine* や、*The Queen* などこの時代の重要な女性雑誌を出版したからというのみではなく、彼がこれらの雑誌の読者欄や編集者欄などで展開した編集者としての彼の思想や編集方針が、この時代の女性読者に受け入れられたからである。それは女性読者に最適な読み物を提供し、かつ彼女たちの知的関心を高め、かつ彼女たちの自立心を支援したりする一方で、恋愛相談にのり、コルセット論争や笞打ちの是非などの社会、文化的論争を誌上で展開した。

さらに *The Englishwoman’s Domestic Magazine* において定期購読者に金時

計などのプライズを出すという販売戦略や、エッセイ・コンテストにより読者に投稿や執筆を促すという企画も、雑誌の成功につながった。つまり彼の編集方針であり、また彼の販売戦略は、読者を受け身ではなく、能動的に雑誌に関与させていくものであった。

それは前述したような、イギリスの社会状況の中で、家庭のみならず、社会との接点を求めていた女性読者たちの需要に応え、読書を通して女性同士のネットワークを構築していくことに貢献することになる。

The Queen は *The Englishwoman's Domestic Magazine* よりも、10年ほどのちに創刊されており、読者層もより裕福で教養ある層を対象にしている。最も大きな違いは週刊誌(週刊紙)であったことだろう。*The Englishwoman's Domestic Magazine* が1852-77年の四半世紀という長期にわたったのに比べて、*The Queen* に Beeton が関わったのは1861-63年の3年間である。*The Queen* はその後出版社が変わり、*The Queen: lady's newspaper and court chronicle* とタイトルを一部変更しながらも1970年まで続く。

本論で研究対象としたいのは、Beeton が出版した3年間の *The Queen* である。創刊は、1861年9月7日である。サプリメントが付いて値段は6ペンス、16頁からなっている。表紙のタイトルはその名前にふさわしく、王宮を背景に、女性が音楽、絵画、文学、刺繍にいそしむ姿が美しく配置されている。タイトルページを飾るイラストは、女王のアイルランド訪問である。週刊誌に6ペンスを払える女性は明らかに中産階級であり、*The Queen* は年収£300以上を読者層に想定する、class paper であった(Beetham 89)。それゆえ、同じ Beeton が出版する *The Englishwoman's Domestic Magazine* とは、異なる紙面作りが求められている。

第1に、興味深いのは、創刊号の“Review of the Week”で述べられている次のような編集方針である。

When we write for Women, we write for Home. We shall offend very few when we say that women have neither heart nor head for abstract political speculation; when as for our own liberties, or our political principles, they may be safely left to men bred in the honest independence of English households. (Sept. 7, 1861)

現在なら物議をかもしそうな議論であるが、この編集方針は、ヴィクトリア朝時代には、一般的であった男女の性別役割分業を是認しているにすぎ

ない。つまり、公的領域である政治は男性に任せ、女性は私的領域である家庭を守るのだから、女性誌である *The Queen* の焦点は、家庭であるというものだ。

さらに、前後の関係から、Home はイギリス国内を意味してもいて、海外のニュースについては、多くの紙面を割かず、簡略にすると述べている。このような編集方針は、前述した1860年代という時代背景を考えれば、やや保守的な編集方針であるといえる。本論では、このような編集方針が、*The Queen* の内容や構成にどのように影響を与え、いかなる意味を持っていたのかなどを検証していくことにしたい。

Margaret Beetham によれば、*The Queen* の紙面作成は、*London Illustrated News* に範をとっている (Beetham 90)。しかし、創刊号に掲載された“Going out of Town” や “Holiday at Margate” (Sept. 14, 1861) などの挿絵は、明らかに同時代の風刺雑誌である *Punch* の影響を受けているのではないだろうか。

“Going out of Town” では、休暇のためにロンドンを脱出する紳士淑女が、列をなして、ロンドン橋を渡り鉄道の駅に殺到する様子を描いている。さらに “Holiday at Margate” では、そのようにしてロンドンからやってきた人々で溢れかえるマーゲイトのホテルで、疲れきって眠る女性や、満室で部屋もとれずに廊下や階段で眠る人々が描かれている。ここで描かれている人々は、これを読んでいる読者層と重なる、つまり読者は誰もが同様の経験を共有している。休暇のためにロンドンを離れ、日常から解放されてくつろぎを求めて出掛けた先で、疲れきってしまう紳士、淑女の寝姿に、読者は共感と笑いを禁じ得ないのである。このパンチ風の挿絵はその後も、“The Shooting Season—Charms of An English Drawing-Room After a Good Day’s Sport” (Sept. 28, 1861)、“St. Valentine’s Day” (Feb. 15, 1862)、“The Good-Natured Man” (March 8, 1862) と続いている。

それゆえ、イラストレーションに関しては、*London Illustrated News* の系譜に属する客観的なニュース報道の挿絵と、*Punch* の風刺画の流れを汲むものが混在している。もっとも枚数からいえば、ニュースあるいは、ドキュメントの手法で用いられているイラストレーションの方が多い。

例えば、ニュース報道という観点からは、鉄道事故現場 (Sept. 7, 1861) のイラストがあり、大型客船グレート・イースタン号の遭難 (Sept. 28, 1861)、法廷場面 (Sept. 28, 1861) など枚挙にいとまがない。紙面のサイ

ズは、A3に近い大判であるから、挿絵のインパクトはモノクロではあるが極めて大きい。

特に鉄道事故の見出しの下につけられた、“The Brighton Slaughter”と“*The Kentish Town Slaughter*”からは、この時代の列車に対する恐怖感や不安感が伝わってくる。加えてそれにつけられた挿絵がともに、臨場感溢れるものとなっている。列車事故でトンネル内に残された乗客の様子や、横転した列車、そこから担架や馬車で運び出される怪我人などの描写が生々しく描かれている(図1)。そのキャプションには、“*Drawn from a Description by a Passenger*”、あるいは“*Sketched on the Spot*”とわざわざ速報性と現場主義を強調している。

グレート・イースタン号の遭難でも、臨場感を強調するためにイラストは効果的に用いられている。大海で嵐に見舞われて船体が傾くグレート・イースタン号のイラストに加えて、嵐のために水浸しとなった女性用の談話室の様子、嵐の後に乗客の衣服などが散乱する荷物室などがイラストで示されている(図2)。

これは、月刊誌 *The Englishwoman's Domestic Magazine* とは異なり、週刊誌として *The Queen* が成功するために必要な特色であった。月に1度出版する月刊誌と、週に1度出す週刊誌とでは、その魅力は各々異なる。週刊誌の魅力は、この時代の月刊誌の魅力であった小説ではなく、むしろ速報性や臨場感に溢れた報道であり、時宜を得たレビューなどであった。

つまり、前述した創刊号での巻頭言とは異なり、*The Queen* が週刊誌として成功するためには、ニュース報道を積極的に掲載する必要があり、*home* や *household* にその領域を限定することは、現実的にはあり得ないことであった。そのために欠かせないのが事故現場などを描いたイラストであった。女性雑誌の真骨頂でもあるファッション・ニュースとならび、時事ニュースは、一般読者向けの新聞や週刊誌と同様に、女性週刊誌にも不可欠であった。それゆえ鉄道事故などの事故報道、スキャンダルとなった事件の裁判風景などがイラストとして毎週号に掲載された。

さらに時事問題は、積極的に扱われており、*The Queen* の重要な要素である。例えば、“*Hops and Hop-Pickers*” (Sept. 14, 1861)、“*London Interiors*” (Sept. 21, 1861)、“*The Deceased Wife's Sister*” (Feb. 22, 1862)、“*Infant Mortality*” (March 1, 1862) などがそれにあたる。これらの時事問題は、必ずしも女性に関係するものに限定されているわけではない。

“Hops and Hop-Pickers”は、イラスト入りで、ホップ摘みの重労働の有様を克明に伝えている。幼い子供も共に家族総出で働く状況や、疲れきった労働者たちが、横になる場所もなく壁にもたれるように眠る様子が、描かれている。乳飲み子を抱えた母親の足元には幼子が2人眠りこけている。1840年代の社会小説が、労働者や貧しい人々の窮状を、中産階級読者層に訴えた手法に極めて近いものがここにはある。

この記事の次頁には、前述した“Holiday at Margate”があり、2枚の眠りこける人々のイラストは、中産階級と労働者階級の生活の違いを鮮明に伝えている。

前述した“Going out of Town”や、“Holiday at Margate”などとは対照的に、ここでは、女性読者層が通常は目にすることのない人々への関心を喚起することが狙いである。しかし Beeton の編集方針は、ここに留まることはなく、さらにもう1枚のイラストを加えている。それが“Sleeping Apartment of Foreman Picker”である。現場監督の寝室は仕切られており、ベッドもあるようだ。なぜ仕切られているのかと問われると、“Decency—Sir, decency!”と情報提供者は「憤慨して (reprovingly)」答えている。

ここに嘘があるとはいわないが、ある種の操作が加えられていると感じるのは私だけだろうか。つまり労働者階級の惨状を赤裸々に訴える一方で、それを幾分和らげようとする笑いの要素がここには滑り込んでいるのではないだろうか。そのような操作は幾分感じられはするものの、同様の社会問題の告発は続く。

次に見たいのは、“London Interiors: Home of the Spitalfiels Silk-Weaver”である。ロンドン東部のスピタルフィールズに住む絹織物の職工の悲惨な生活と末路を記事にしている。産業革命によりそれまで、職人により織られてきた織物は工場生産されるようになっていく。その過程で手仕事は機械化されていき、職工は姿を消していく。そのような産業化の中で、家族で糸を紡ぎ機を織っている家内工業の一家は、朝から真夜中過ぎまで働いたとしてもわずかな収入にしかならない。怠惰ゆえにではなく、時代の変化により、貧困に陥りそこから生涯抜け出せない織工に焦点を当てている。

絹織物の織工に注目したのは、中産階級の女性たちの服地として用いられ、馴染みがあったからであろう。しかし産業化などの時代の変化により、恩恵を受けている中産階級の陰で、そのような時代の変化の中で個人の努力では、どうにもならない貧困が人々を苦しめていることを伝えている。

勝ち組の中産階級読者層に、そのような繁栄から転落し取り残された人々の辛酸を伝えている。

同時期の1861年に、George Eliotが、リネン織職工を主人公にした小説、*Silas Marner*を出版しているのは、偶然ではないだろう。産業化による社会構造や経済構造の変化の中で、取り残された職種として職工は象徴的な意味があったと思われる。

同様に、同時代の社会状況の変化について書いている記事が、“Infant Mortality”である。最近の新聞や雑誌では、“murderous assaults”や“atrocious outrages”など暴力、殺人、強奪などの記事で社会不安をかき立てているが、10年前に比較して社会が残虐になったとは信じられないと、記事は書いている。これは前述した1860年代の煽情小説の隆盛を考えると、極めて興味深い指摘である。

なぜなら、煽情小説はそのような殺人、暴力、放火、不倫、重婚などが、それまでは平穏であると信じられていた中産階級の家庭の中で起きていることを描いた小説であったからだ。“Infant Mortality”が指摘しているのは、そのような傾向が小説のみではなく、当時のジャーナリズム全体に蔓延し不安を煽っていたことを指摘している。この記事は、そのような大衆ジャーナリズムと一線を画すために客観的な数値を上げて、幼児殺人の問題を取り上げている。

それによれば、1861年のみで、2歳以下の幼児の検死体は、ロンドンだけで4000体近い。しかもその多くは、親、特に母親により殺されたものだとしている。未婚の母親が養育できずに殺したり、共済会からの葬儀代が欲しくて殺しているのではないかと推論しているが、その責任を未婚の貧しい母親のみではなく、社会の責任としてとらえ、社会問題として解決していくことを次のように提案している。

... we have still to deal with the fact that hundreds of children are killed every year by Society, its sentiment, exigencies, defects—what you will. Other lives are sacrificed by natural wickedness, —these to dictates of artificial creation, the growth of modern communities. Society, then, is greatly responsible for this sort of murder; and murder by the thousand is too heavy a responsibility to be borne any longer without inquiry at least. (March 1, 1862)

母親の幼児殺しというセンセーショナルな事件を冷静な分析で、社会全体の問題として位置づけ解決するために、詳細な調査を提案している。

このように社会問題に対する信頼できる扱い方は、女性に関係する問題でも変わらない。それは、亡妻の姉妹との再婚法案を扱った、“The Deceased Wife’s Sister” (Feb. 22, 1862) である。これは、妻を亡くした夫が亡妻の姉か、妹と再婚することを、合法化しようとする、Mr. Milnesを始めとする人々が提出している法案に反対の立場で書かれている。

聖書では、このような再婚を認めているのではないかという Milnes の主張に対して明確に反論しており、次のような議論の展開は、家父長制社会における、Milnes たちの男性中心主義を辛辣に批判するものとなっている。

If a man may wed his wife’s sister, why should not a woman be permitted to marry her husband’s brother? Is there any argument in the one case that will not apply to the other? At best, Mr. Milnes proposes *an absurdly one-sided piece of legislation*, the consequences of which it would be dangerous to follow, we think.

(Feb. 22, 1862, italics added)

「馬鹿げているほど偏った法案」と断罪して、この続報をさらに、“Marriages of Affinity” (March 15, 1862) で、下院で却下されたことを伝え、さらに大差で否決されたことから、再びこのような議論は生じないであろうと結んでいる。

21世紀の現在ならば、そして多くの女性ジャーナリストがいる現在ならば、このような立場で書くことは、当然である。しかし、男女が社会的にも経済的にも異なるという前提が広く認められていた19世紀のイギリスにおいて、姻戚結婚に対する辛辣な論評は、女性誌の読者の意見を代弁するものとなっている。

同様に男女の性差により法的に不公平が生じていると主張しているのが、“Property ‘Tied Up’” (Sept. 21, 1861) である。こちらは夫が亡くなるときに、妻への遺産の相続に、遺言で限定を付すことへの不合理を指摘したものである。夫は遺言で未亡人となった妻が再婚した場合には、遺産を相続できないように限定条件をつけることができる。このような慣例に対して、次のように反対している。

He therefore declares by will that his wife is either to remain a widow or to relinquish his estate. Here is a pretty pitfall for the widow! The husband may have a right to dig it; but in that case he ought, perhaps, to leave “lead us not into temptation” out of his prayers. We must and do respect the woman who marries not again, her husband being dead; but there is no earthly reason why she should not do so if prudence or a new passion prompt her. (Sept. 21, 1861)

これらの女性に関係する社会問題を議論するスタンスは、明らかに女性の立場で書いている。1860年代という時代背景を考慮すれば、性のダブルスタンダードに基づく不平等に、女性たちが感じている不満や不平を形にし、活字にしていこうとしている。このような Samuel Beeton の編集方針は、女性参政権運動を支持していた J. S. Mill などとも親交があり、一貫して革新的なものであった (Freeman 77)。

その一方で、中産階級の女性の務めである慈善活動を支持する記事、“Work for Starving Needlewomen” (March 15, 1862) も掲載している。ここでは、知的女性は男性同様に担うべき使命があると主張している。“Bloomerism” や “Pettiloons” はアメリカ独特の誇張であると退けているが、女性は家庭の領域を離れて社会で真の合法的天職があり、家庭の仕事と両立可能だとしている。これは保守的な女性読者層の感情を十分に汲んで言葉を選択して書いているところが興味深いので、その箇所のみを見ておくことにしたい。

... women have rights, not in *the vulgar sense* of “women’s rights,” but *a true and lawful calling* in the world quite apart from their ordinary domestic duties, but not at all incompatible with them. (March 15, 1862, italics added)

ここでいう “the vulgar sense” とは、前述のブルーマリズムに代表されるような男女平等主義を批判したものであり、同胞の女性に対する慈善活動を “a true and lawful calling” として推奨しているのは、女性の務めという保守的な男女観の枠組みをむしろ補強しているものだろう。このように詳細に紙面を分析してみると、*The Queen* の編集方針が、いかに細心の注意を払い微妙なバランスを保つものであったかがわかる。

Beeton 自身は進歩的な女性観を持っていたが、中産階級女性読者層の

どのくらいの人々が彼と同様に進歩的であったかを知るのは、困難である。それは1860年代という女性に関する議論に、潮目が見えてくる時代であったからこそ、困難な女性誌の編集であったといえる。それゆえ彼の編集は、どちらかに偏ることなく、微妙なバランスを保つことで、女性週刊誌として成功を勝ち得ていった。

次に見たいのは読者投稿欄である。最初は、“The Emigration of Educated Women” (Sept. 14, 1861) である。この内容も当時の中産階級の女性が直面していた職業状況をよく物語っている。投稿者は、イギリス社会では人口比から女性が男性に比べて多く、女性は結婚できずに余っている状況であると問題提起している。そのような状況であるにも関わらず女性が公的な仕事に就くことへの偏見があり、大きな社会問題となっていると指摘している。The Society for Promoting the Employment of Women のレポートにも言及して、いかに女性たちが限られた職業に殺到しているか事例をあげている。年収£20、ときには年収£12のガヴァネスにさえ数百名の応募者が集まるという中産階級の女性たちの就職難の現状を述べている。

そのような女性たちには、年収£60でシドニーのガヴァネスを勧めたいとしている。さらに読んでいくとどうやら投稿者は植民地へガヴァネスを派遣する事務所をロンドンに開設したばかりで、この投稿は半ば事務所の広告である。しかしそのようなガヴァネスの派遣先が、オーストラリア、ニュージーランド、カナダ、南アフリカ、ブリティッシュ・コロンビアとなっており、中産階級の女性たちが *respectability* を保って生きていくために、異国の地にまで赴かねばならなかった矛盾が明らかになっている。“the more educated your candidates the better chance of their success” と植民地での受け入れ先の人物の言葉を引用しているが、状況はそれほど楽観的ではなかっただろう。しかし渡航費は、無利子で貸し付けできるとしていることから、資産を全く持たない中産階級の女性たちが、応じることのできた職業情報であったことは間違いない。

比較的裕福な中産階級読者層を想定しながらも、それらの女性たちのすぐ近くに、あるいはそれらの人々がある日突然に、自活を余儀なくされることがあるのもこの時代の社会、経済状況であった。このように、投稿欄は本文記事以上に、赤裸々に同時代の社会状況をよく物語っているものが少なくない。もちろん投稿内容の取捨選択は、編集方針に沿ってなされたものであることは明らかであるが、それでもなお投稿者側の意図を通して

当時の社会状況が垣間見えてくる。

職業と女性という観点では、本文記事“Work and Business”(Sept. 28, 1861)がある。こちらの記述はずっと冷静に、女性を取り巻く職業環境を分析したものである。多くの女性たちが自立を求めている現状であるが、十分な教育や職業訓練を受けずに働いたとしても、仕事を成し遂げることは困難であるとしている。“more work for women”の声の高まりの中で、教育や職業教育の不足により、女性たちが能力を発揮できないでいる問題点を提起している。

このような進歩的な議論と並び、イギリスらしいペットにまつわる投稿も掲載されている。それは、“A Lucky Dog”から寄せられた、“A Dog’s Eye View of the Dog Hospital”(Sept. 28, 1861)である。この号の巻頭のイラストが、“Interior of the Dog Hospital, Holloway”となっており、“Subscriptions and Donations Thankfully Received for the Poor Dogs”という看板が見える。病気や怪我、あるいは捨てられた犬の収容施設で、迷子の犬を探し出したり、犬を欲しい人に斡旋したりもする施設である。動物愛護はイギリスでは伝統的に理解がある分野なので、このような施設の紹介が、女性誌の巻頭を飾ったとしても不思議ではない。同時にかわいそうなもの、弱いものへ救済の手を差し伸べる慈善活動が、女性の社会活動であり、女性の領域であるという認識に立つ、紙面構成でもある。

次に興味深いのは、他の新聞・雑誌への言及記事である。例えば、“Miss Martineau on the American Difficulty”(Sept. 28, 1861)が、*New York Herald*に掲載されたMartineauの書簡から、アメリカでは奴隷制が南北戦争後にも残っていくとの批判を紹介している。Martineauは、*Illustrations of Political Economy* (1832-34)、*Society in America* (1836)など多数の社会・経済論を出版している著名な女性であり、この時期は、*Daily News*の社説を担当していた。その彼女を次のように記述している。

When the most “masculine” woman in the world assumes the tone of expostulation, she puts on the woman. But Harriet Martineau, for all her other characteristics, is, in truth, very womanly in her style. (Sept. 28, 1861)

19世紀初期の奴隷制廃止運動には、女性たちが積極的に参加したことはよく知られている。Martineauもそのような女性の1人であるが、作家と

して大成功した彼女に対する表現としては、幾分揶揄が感じられる。女性の先達として、成功者としてモデルにするというよりも、敬して遠ざけている感がある。これが、傑出した才女である Martineau に対する、当時の一般女性読者の印象を代弁したものであったろう。

さらに、“The Magazines” では、*The Cornhill*、*The Saturday Review*、*Blackwood's Magazine* などの他の雑誌に言及している。なかでも、*Blackwood's Magazine* に Margaret Oliphant が “The Chronicles of Carlingford” を連載中であると紹介して、当時の人気小説に言及している。また、*Temple Bar* に連載中であった Mary Elizabeth Braddon の *Aurora Floyd* を最上の物語として評価しているのは、注目すべきである。つまり煽情小説として、批判が集中していたこれらの大衆小説に対して、明らかにこの記事では極めて高い評価を示しているからだ。

The Englishwoman's Domestic Magazine に、Nathaniel Hawthorne の *The Scarlet Letter* (1850) を掲載したことはよく知られている。重婚、不倫、殺人、放火などの問題が、中産階級の家庭の中で事件となっていく煽情小説に対して、批判する評論が多く掲載されているまさにその時期に、この高い評価は、Samuel Beeton の小説に対する姿勢が、垣間見えるものとなっている。

「教え樂します」という文学の役割から、娯楽としての読書へと次第に推移していくのが、19世紀後半のイギリスでの読書の在り方である。雑誌出版の経験から、読者に支持されない雑誌は生き残ることはできないわけであるから、何が読者の求めているものかに対して、Beeton は鋭敏であった。文学の大衆化は女性雑誌の成功には不可欠の流れである。その意味では、前述した Matthew Arnold に代表されるような保守論客層とは異なり、Beeton は積極的に大衆化を支持していたと考えられる。

そのような読者層の新しい楽しみとして、都市景観を眺めての散歩が挙げられる。そのような魅力的な都市空間を描いているのが、“New Bridge in the City of Paris” (March 15, 1862) や、“The Great Thoroughfares of London” (March 15, 1862) である。21世紀の現在では、新建築への関心はさらに高まり、都市の景観への興味も普遍的なものとなっている。しかし、都市空間を歩き回り、都市建築を見ることが娯楽として共有されるようになったのは、都市という公共空間が整備されていくこの時代のことである。シテ島に架かる橋を新しくし、鑄鉄で装飾を施した新橋を、モダン・

インダストリーの建築として、この記事は賛美している。

The work of erecting it was begun last June; and so energetically and actively was the design carried out by MM. Romany and Sarrasin, engineers of bridges and high-roads, that the bridge was completed before the end of the year. At present, there are very few works of modern industry more elegant and interesting than the new Passerelle de la Cité, in Paris. (March 15, 1862)

イラスト付きであるから、シングル・アーチのすっきりした橋の外観がよくわかる。モダニズム建築の始まりは特定が難しいが、しかしこのパリの新橋を賛美する嗜好は、モダニズムのそれに通じるものであることは確かである。そこには unnecessary 装飾を排した、機能美を良とする現代的な美観がある。

同様に魅力的な都市空間として、当然ロンドンが考えられる。それが、“The Great Thoroughfares of London” (March 15, 1862) で、リージェント・ストリートの美しい景観と、そこを行き交う、イギリス人、スコットランド人、アイルランド人はもちろん、ヨーロッパを始め様々な国の人々が、往来する国際都市のにぎわいをイラスト付きで書いている。イラストの1枚には、サンドイッチマンが描かれていて、彼の背中には、*The Queen* の文字が見えるのも一興である (図3)。このような楽しい仕掛けもあり、*The Queen* の読者は、楽しみながら、彼女らの読書をすすめていったのである。

読者を意識した販売戦略としては、“work-basket” などの “needlework illustrations” は、欠かすことのできない *The Queen* の魅力である。それは印刷技術が向上し、紙質も向上する後期になればなるほど、鮮明で美しいデザイン画と、詳細な模様が提供されている。これらの大判の数頁にわたるイラストは毎週号に、美しいファッション・プレートは月2回は掲載されている。

さらに「お知らせ」では、各号には、あるときはモスリンのハンカチーフ、あるときは女王の写真が付録として付くなど、*The Englishwoman's Domestic Magazine* で培った Beeton の販売戦力はここでも健在である。

読者の購買意欲を後押しする戦略として、雑誌に何らかの付録やプレゼントつけることは、女性雑誌の特徴である。しかしさらに読者を消費者と

して位置づける紙面作りが明らかになっているのが、広告頁の推移である。

創刊号からしばらくは、広告頁は毎週号の最後に配置されていた。しかし1年後には、巻頭に広告頁が掲載されるようになっていく。つまり巻頭のトップ記事は姿を消してしまい、広告に囲まれるように著名人の肖像画が差し込まれることになる。1863年3月には、再び巻頭に記事がかえってくるが、広告欄は縮小はするもののそのまま残っている。

このフロント頁における紙面構成の変化は、明らかに雑誌販売が、広告に依存し、本文記事と広告とがせめぎあっていく推移を反映したものといえる。

本論では、Samuel Beetonが出版していた*The Queen*の初期に焦点を絞って分析を進めてきた。これによれば、この週刊誌の魅力は、1. 多様な記事内容、2. 進歩的論評の適切な配置、3. 女性の視点の導入、4. 伝統的な女性の務めへの支援、5. 付録やプレゼントなども駆使した巧みな販売戦力、6. 豊富で鮮明なイラストなどが、主なものとしてあげられる。しかし、こうしてまとめきれない実に様々な要素が、20頁足らずの週刊誌の中に、詰め込まれており、幕の内弁当のような楽しさと充実感がある。

今回は十分に論じきれなかった広告頁や、1860年代後半期も含めて、さらに*The Queen*の分析を進めていくことにより、この時代の女性読者層の実像と、女性誌の現実とに迫れればと考えている。

*本論は、平成18年度愛知県立大学学長特別教員研究費による研究成果の一部である。

注

- 1 本論で研究対象としている「イギリス女性雑誌」とは、イギリスで出版された女性向けの新聞・雑誌などの定期刊行物全般である。その総称として「雑誌」を用いている。Margaret Beethamも*A Magazine of Her Own?*において、Magazineを総称的に用いて、periodical全般を議論している。
- 2 *The Queen*のサブタイトルは、*An Illustrated Journal and Review*となっており、週刊であるので週刊新聞である。本論では、periodicalのカテゴリーの中に位置づけ、他の女性雑誌とともに分析を進めていく。表記は、週刊誌、女性誌とする。

Bibliography

第1次資料

The Englishwoman's Domestic Magazine

The Lady's Magazine

The Queen: An Illustrated Journal and Review

第2次資料

Arnold, Matthew. *Culture and Anarchy* (ed., by R. H. Super) Michigan U. P., 1965.

Beetham, Margaret. *A Magazine of Her Own?* London and New York: Routledge, 1996.

Bowlby, Rachel. *Just Looking: Consumer Culture in Dreiser, Gissing and Zola*. New York: Methuen, 1985.

Braddon, Mary E. *Lady Audley's Secret*. (ed. by David Skilton) Oxford UP, 1987.

Dancyger, Irene. *A World of Women: An Illustrated History of Women's Magazines*. Norwich: Gill and Macmillan, 1978.

Flint, Kate. *The Woman Reader 1837-1914*. Oxford: Clarendon P., 1993.

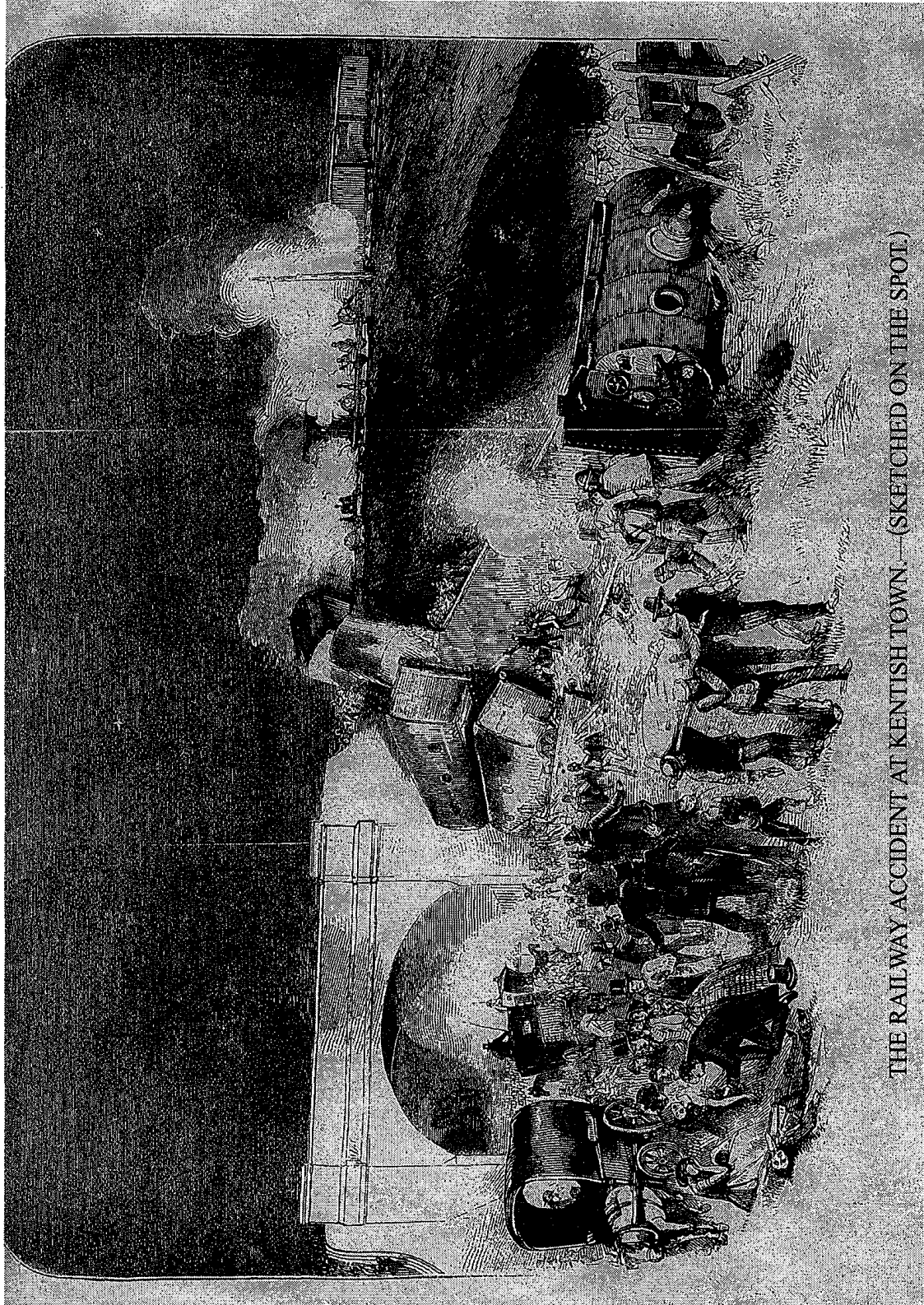
Freeman, Sarah. *Isabella and Sam: The Story of Mrs. Beeton*. London: Victor Gollancz, 1977.

Mitchell, Sally. "Sentiment and suffering: women's recreational reading in the 1860s," *Victorian Studies* 21 (1977), 29-45.

Oliphant, Margaret. "Sensation Novels," *Blackwood's Edinburgh Magazine*, 91 (1862), 564-84.

——, "Novels," *Blackwood's Edinburgh Magazine*, 102 (1867), 257-80.

Onslow, Barbara. *Women of the Press in Nineteenth-Century Britain*. Macmillan, 2000.

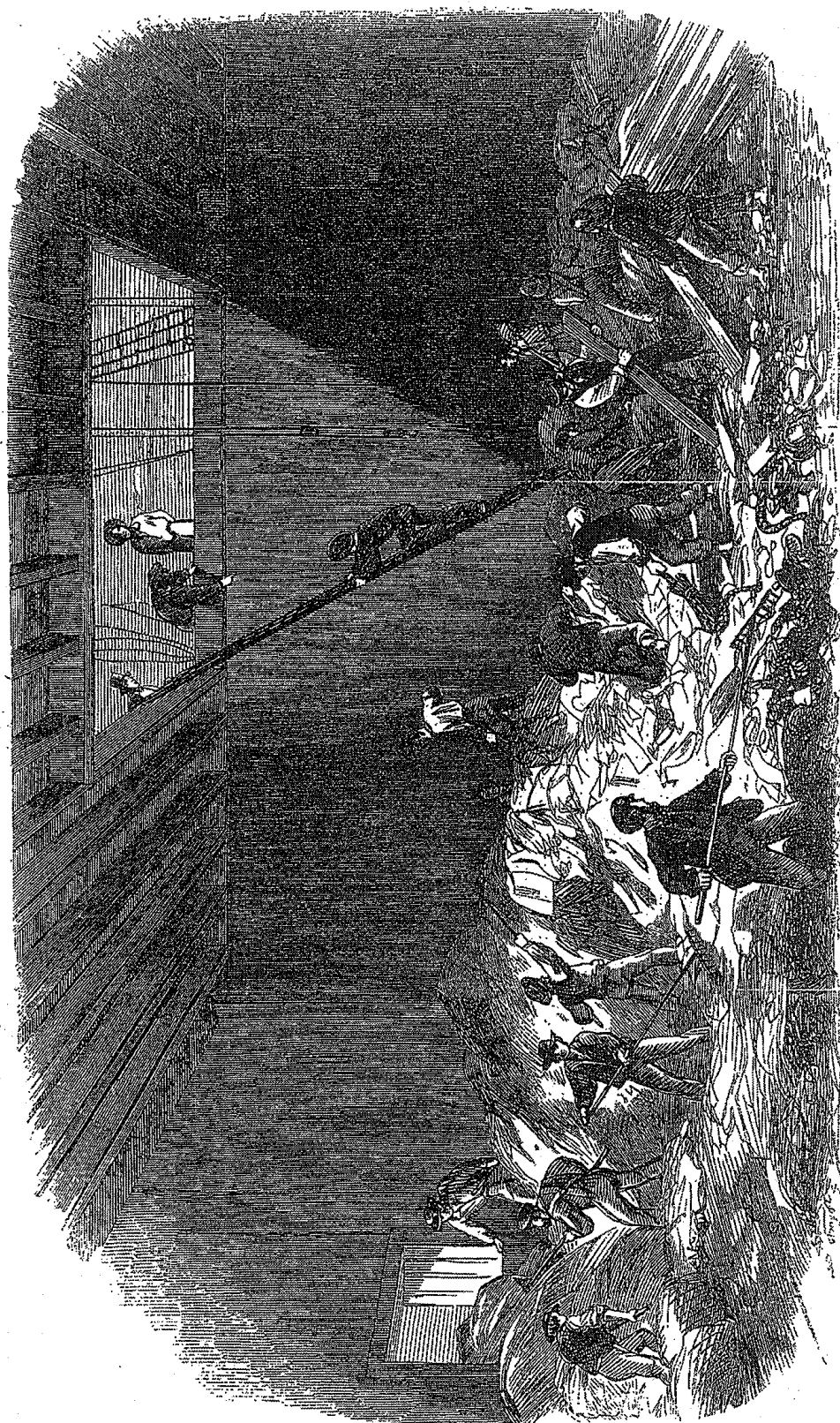


THE RAILWAY ACCIDENT AT KENTISH TOWN.—(SKETCHED ON THE SPOT.)

図1. 鉄道事故現場 (The Queen Sept. 7, 1861)

SEPT. 28, 1861.

THE QUEEN.



THE LUGGAGE-ROOM AFTER THE STORM. —SKETCHED IN CORK HARBOUR.

図2. 遭難後の大型客船グレート・イースタン号の荷物室 (The Queen Sept. 28, 1861)

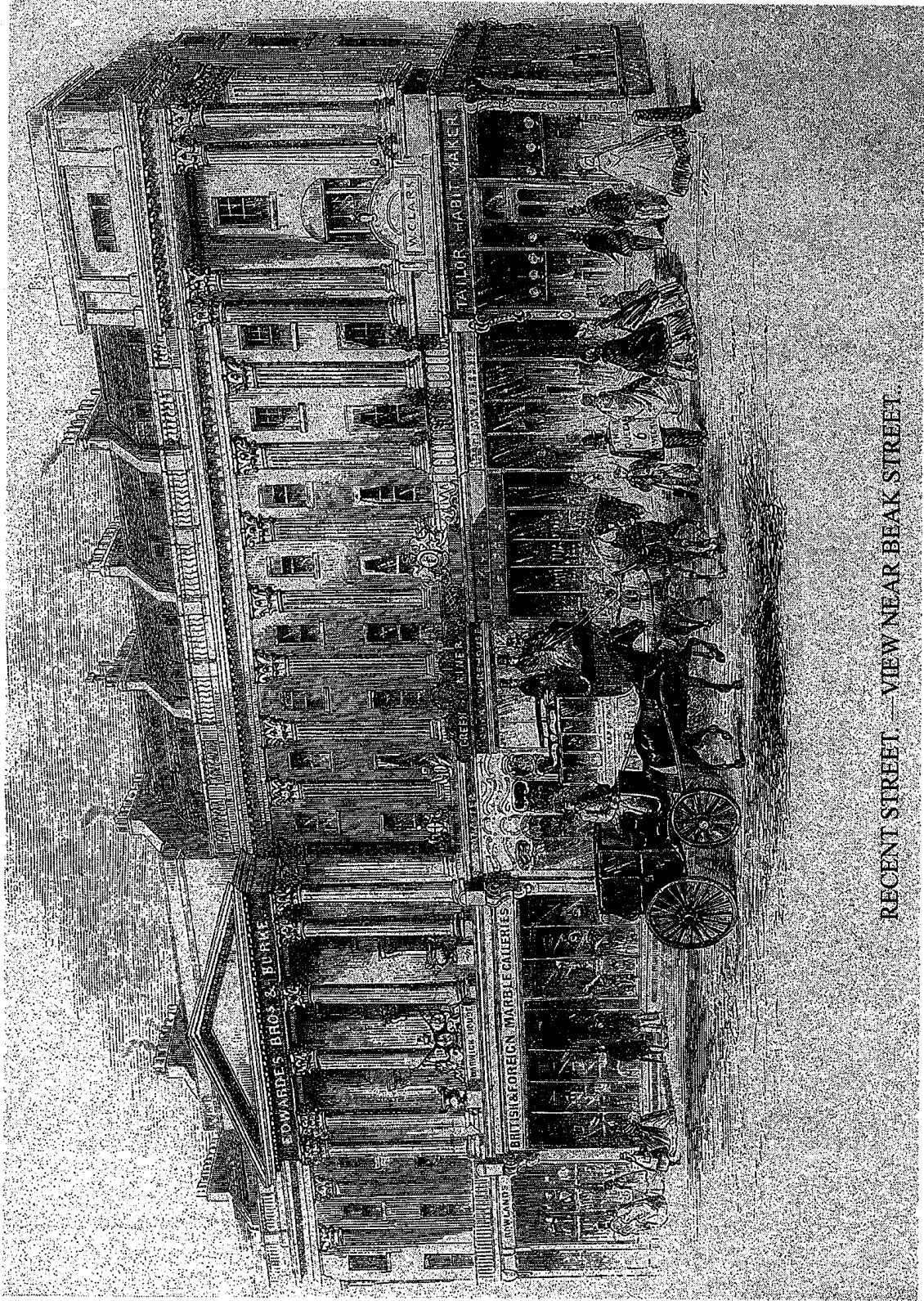


図3. リージェント・ストリートの往来とサンドイッチ・マン (The Queen Mar. 15, 1862)